

FU EIKI

vol. 76



「より効果的な助成事業にするための」

アンケート調査



概要報告

当財団はこどし8月設立35周年を迎えました。当財団事業の柱である助成事業を、更に効果的に地域振興に貢献できるものになるようアンケート調査を実施しました。

本調査の対象は、福武教育振興財団と福武文化振興財団が統合し福武教育文化振興財団となつた2008年度から2020年度に助成を受けられた団体・個人の皆様(1327団体)に、助成団職員が実施するフォローアップ(成果報告会や情報提供など様々な非資金的支援)や財団へのご意見等について伺いました。アンケート調査の回答率は、38.28%でした。ご協力いただき、厚く御礼申し上げます。回答についてご報告します。

美作エリア

津山市	真庭市	美作市	新庄村	鏡野町
36	10	10	1	4
勝央町	奈義町	西粟倉村	久米南町	美咲町
4	6	6	4	3

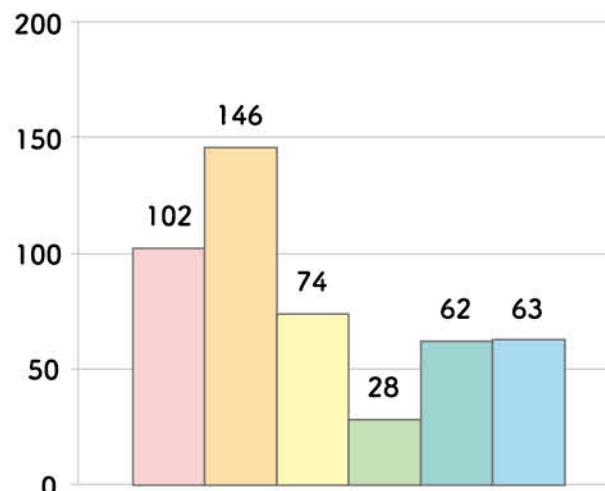
その他
10



助成受け現在は？…半数以上が活動を発展、維持継続

(設問) I. 助成を受けて実施された活動について、2021年6月現在の状況を教えてください。

規模や活動内容を発展させて行っている	102
同規模の活動規模や活動内容で継続して行っている	146
規模や活動内容を縮小して行っている	74
活動内容は他の団体に引き継いでいる	28
現在活動は休止している(再開の予定あり)	62
現在は活動を実施していない(再開の予定なし)	63



「コロナ禍の影響で、活動の停止を余儀なくされている」

「再開を検討中にコロナの影響を考慮して中止した」

「組織内で制度化され、軌道にのっている」

「2020年～2021年にかけて新型コロナウイルス感染予防のため、数回中止しましたが、

対策を徹底して行っています。活動内容等の変更はありません」

「コロナが収束すれば活動を再開する予定あり」

「他市町村に広げることができている」

「地域の方々、活動を通じて知り合った団体や個人の皆様と会員全員力を合わせての活動を展開しています」

「助成いただいたから少しずつですが活動の地域が広がっています」

「会員の高齢化により、活動全体が縮小している」

回答者の
声

1327団体に依頼。38.3%が回答

団体区分

個人	学校関連	任意団体	法人格あり
27	49	337	51

年度

2008年度	2009年度	2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度
22	31	28	28	33	34	33
2015年度	2016年度	2017年度	2018年度	2019年度	2020年度	
26	28	36	35	53	77	

地域

備前エリア

岡山市	玉野市	備前市	瀬戸内市	赤磐市	和気町	吉備中央町
166	14	14	17	14	3	6

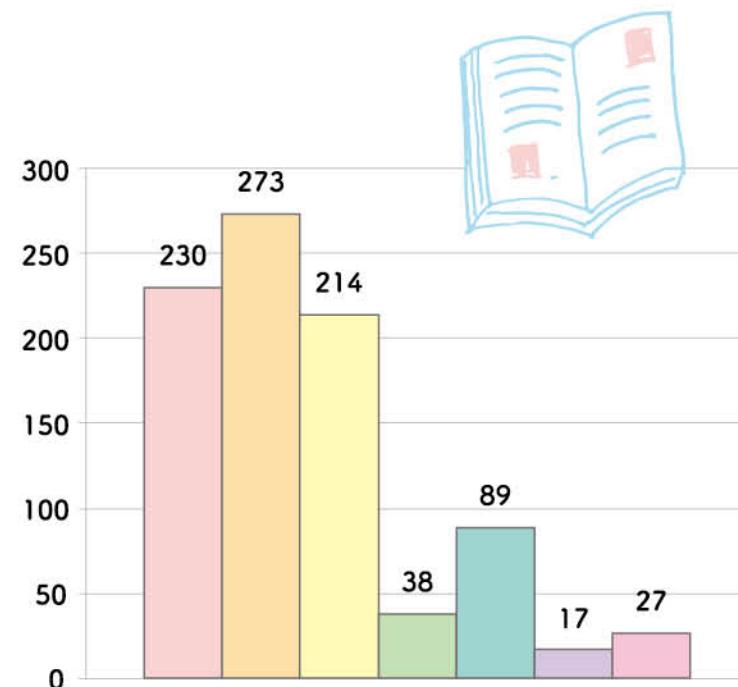
備中エリア

倉敷市	笠岡市	井原市	総社市	高梁市
57	12	7	21	11
新見市	浅口市	早島町	里庄町	矢掛町
4	9	6	1	8

助成で変化は?反応は? … 信頼度、知名度の向上につながる

②助成を受けたことで、【団体】には当時どのような変化や反応がありましたか。

知名度の向上に役だった(マスコミ、地域での知名度等)	230
信頼度の向上に役だった	273
新たな資源(資金・人材・ネットワーク等)の獲得につながった	214
職員のスキルアップにつながった	38
法人格の取得につながった	89
影響はなかった	17
その他	27

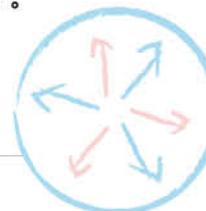
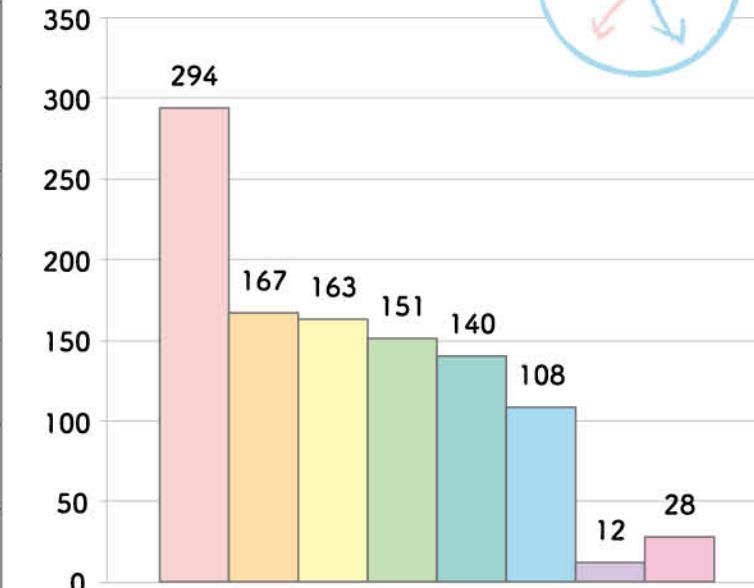


助成を受けた当時の変化や反応は? … 活動の規模が拡大

(設問)II. 助成を受けた当時の変化や反応について教えてください。

①助成を受けたことで、【活動】には当時どのような変化や反応がありましたか。

活動の規模拡大の基礎作りに役だった	294
参加者や地域のニーズが理解・把握できた	167
マスメディア等で紹介された	163
活動対象者や対象地域が広がった	151
活動の連携先が増えた	140
自主財源を得るきっかけになった	108
影響はなかった	12
その他	28



「主催するメンバー、団体だけでなく、関係する団体などの理解や協力、

参加などにつなげることができた」

「活動の初期でしたので、基礎作りに大変役にたちました。話し合いの組織作りもできた」

「メンバーの意識が変わった」

「助成金申請のために事業活動の明確化すること、企画・予算管理等、法人事務が確立されたことは良かった」

「信頼が増したのは大きい」

「地域の団体や他の団体に、公募助成を受けたことで事業の説明に理解を得やすくなった」

「話題の乏しい中山間周辺地域であり、会を設立する前段階であり、

貴財団からの助成決定は、地域で大きな話題となった。地元での協賛金調達に効果があった」

「町との連携がより密になり、また、さまざまな外部との連携や協力により、情報のやりとりをする中で、

団体の構成員同士がよりしっかりとつながったり、地域住民の地域活性化しようという意欲・意識が高まつたりしたように思います」

「活動が充実してきたために入団希望者が増えた」

「狭い地域で活動する団体から、広い地域での活動に対応する団体へと発展する契機となりました」

回答者の
声

「福武教育文化振興財団から助成を受けている事業ということで

他方面から評価され、事業価値が高まった」

「活動内容を広く知っていただくきっかけになった」

「関わった青少年が美術系の進路を選択するなど、地域文化の教育資源の一つにもなった」

「企画の質を高めることができた」

「真備町だけでなく、防災に関する活動を行う団体・組織との連携を図ることができた」

「当時は、テレビニュースでも取り上げられて盛り上がった」

「地域のボランティアに対する意識も一時的に盛り上がったが、あまり浸透していないように思える」

「地域とのつながりを含め、気運が盛り上がった所でのコロナ禍は痛い。どうやって、再度気運を盛り上げるかが、これからの課題である」

「特別支援学級等で学ぶ子どもと保護者のニーズが把握でき、活動に大いに役立った」

「この活動により大学との連携、中学校との連携そして、市役所の連携が構築できた」

「マスコミ各社にも取り上げられ、活動が大きく広まった」

回答者の
声

助成金以外の支援(フォローアップ)で活動をサポート



成果報告会及び交流会

ステージとポスター
セッションで成果報告。約400名の参加者で会場は賑わいます。その後の交流会では名刺交換が始まり、ネットワークをひろげる機会となっています。



エリア別オンライン情報交換会

コロナ禍で会えない状況ですが、オンラインで団体の活動をゆっくり聞くことができます。マッチングや情報提供の場面もみられます。



andF教室



「ともに学び、ともに考える」をテーマに「学びの場」として教室を開催しています。聞くだけでではなく後半はワークショップで更に学びを深めています。

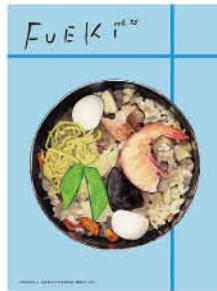


現場訪問

活動現場へ訪問して成対象者の声を聞いています。実際に足を運ぶことで、活動を深く知ることができます。



FUEKI



財団の活動を誌面にした機関誌。岡山県内の約220箇所に配布。助成対象者等の活動チラシを同封することができます。



財団訪問

財団に聞いてみたいこと、教えてほしいことなどに応えます。申請や活動の悩みなどの相談もできます。

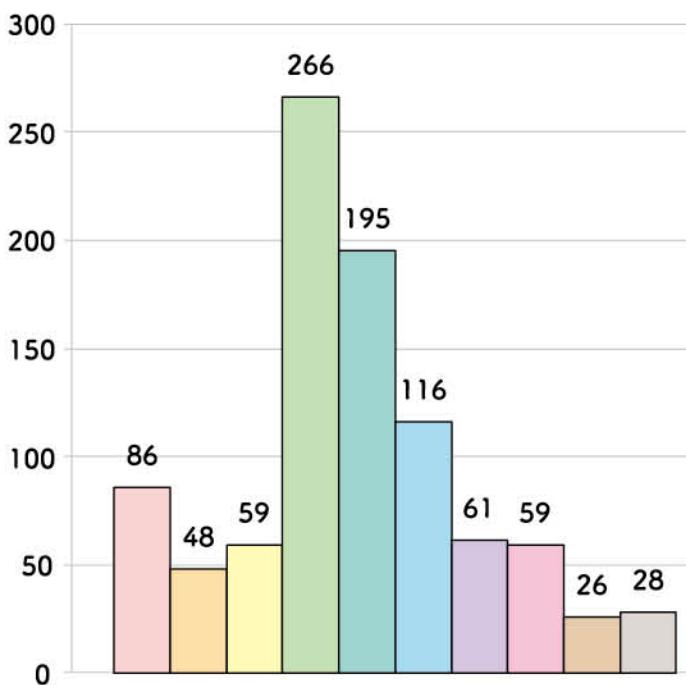


財団のフォローアップは？…良かった、交流会、成果報告会

(設問3)Ⅲ. 福武教育文化振興財団のフォローアップについて教えてください。

①助成金以外の支援(フォローアップ)として、「これまで受けて良かったもの」。

申請時の相談(andF相談会等)	86
助成を受けた後の個別相談	48
他団体の紹介・マッチング	59
活動成果の発表・公開の機会(成果報告会、成果報告書等)	266
他団体の事例共有・交流の場(交流会、成果報告会等)	195
広報支援(Facebook、ウェブサイト、FUEKI等)	116
財団主催のセミナー等(andF教室、フォーラム等)	61
財団職員による現場訪問(イベント・発表会の視察等)	59
新型コロナウイルス関連(オンライン相談、エリア別情報交換会等)	26
その他	28



回答者の声

「助成金以外の支援はあまり十分に活用できなかった」

「特に支援は受けていない。支援があることを知らなかった」

「自立できるような視点、より事業価値を高めていく視点などいろいろなアドバイスをいただいている」

「成果報告会や交流会で他団体の活動内容について見聞きして、とても参考になった」

「個別にメールで相談をした際、迅速に返答をいただけたのが大変助かった。いつでも相談できる相手いるという安心感に繋がった」

「成果報告書を読んだ奈義小学校の教員から取り組み内容に関する問い合わせがあった」

「FUEKIに紹介されていた絵でグラフィックコーディングというものを初めて知り、本校の昨年度の取り組みを1枚の絵に仕上げていただき、PRに利用している」

「近隣の方々とのZOOMでの交流会は大変良かったです」

「成果報告会は私たちの手本として参加することができました。FUEKIは楽しみにして拝読しています。また、私が苦手なデザイン等参考にするところが多いです」

「andF教室のいくつかに参加。特に2019年に開催された『SDGsの視点』『Society5.0』など知らない内容が多かったので、大変勉強になった」

アンケート調査結果から

みえてきた

本アンケート調査事業のアドバイザーである青尾謙さん

が調査結果を踏まえながら、当財団の助成金のほか、

トヨタ財団の助成金や行政の補助金も活用した経験を持つ成清仁士さんにリアルな声を伺いました。



青尾謙 aoo ken

岡山大学大学院 社会文化科学研究所 准教授 / 公益財団法人助成財団センター参与

1975年東京都生まれ。民間企業や国際協力NGO(ベトナム)、国際機関(ウガンダ・NY)、トヨタ財団、日本財団を経て、現在は岡山大学でソーシャル・イノベーション分野の研究教育と岡山大学のSDGs推進、地域コミュニティとの連携協力事業も担当している。

成清仁士 narikiyo hitoshi

ノートルダム清心女子大学 人間生活学部人間生活学科 准教授

1980年岡山県岡山市生まれ。総社高卒。広島大学・大学院で建築史・意匠学を学ぶ。鳥取市中心市街地活性化協議会タウンマネージャー、鳥取大学地域価値創造研究教育機構准教授などを経て、2020年より現職。2012年よりNPO法人倉敷町家トラスト理事。

青尾 アンケートに回答されて、どんなことを感じられましたか。

成清 「倉敷の各時代の復元地図及び歴史遺産案内地図の作成と、その活用」で活動したのがスタートで、その後いろんな人と繋がりができ、展開がありました。昨年岡山に戻ってきてライフワークとして再稼働させていますが、振り返ってみると、そういう立ち上げのきっかけを作ってもらったというこを感じました。

青尾 教育文化活動助成は一種の登竜門。鯉が竜になっていく上での大事なステッピングストーンでないかと思っています。

成清 まさに滝の手前の池にいた鯉だったなと。博士課程の3年次の学生だったんです。が、本当に企画書しかないわけです。企画書の段階で拾い上げていただいて、すごくありがたかったです。そこからまさに滝を登りだしたのかなと思います。

青尾 その3年間、また助成を受けられた後はどういう感じで展開していきましたか?

成清 2年目の秋ごろにトヨタ財団の助成に応募して採択され、3年目には教育文化活動助成とトヨタ財団の助成を受けて活動しました。5年目には全国商店街振興組合連合会の活性化事業補助金の紹介を受け

がったと、非常にポジティブな効果が言われています。非常に積極的に評価していただいているところがあります。

成清 自主的な活動が多いと思うので、外部評価を得たことで「期待されている」「認められた」というところが「自信」につながっていました。しっかりと基盤のない状態でスタートすることもあると思うので、僕の場合もそうでしたが、財団の助成を得たことで、がんばってねとか声をかけていた大体が、すごく強い力をいただいた気がします。

青尾 フォローアップについての回答では、「支援があることを知らなかっただ」という声もありました。

成清 時々財団に行って、近況報告をさせてもらつて、方向性を確認できたり、元気をもらつたりしたような気がします。が、フォローアップしてもらうという意識ではなかったです。

青尾 最近はコロナ禍でなかなか集まれないので、オンラインで情報交換会を財団では実施していますが、どう思われますか。

成清 すごくいいと思いますね。オンラインの情報交換会は、全然お会いしたことのない方の活動をじっくり聞くよい機会になっています。前のような対面で400人参加する発表会、交流会が実施できた際には、それがさらに良

て、商店街と連携する形で活動しました。そこまで5年間、ものすごく展開したと思いました。

青尾 活動をやつてみて地域の実情を知る、それによって新しい活動を展開していくことがありますか。

成清 最初の1年目は自分でできること、2年目3年目と続ける中で、人に協力を求めながら、迷惑をかけながら、活動をひろげていったという感じです。すごく成長をさせてもらいました。

青尾 アンケートの最初の質問は、「助成金を受けた当時と比べて現在の状況はどうなっていますか」でした。もちろんコロナの影響で中止や延期というのも多いのですが、発展させている、同規模または縮小して継続しているというのが約7割。これは僕からすると驚きました。

成清 そうだろうなという気がしました。僕も何度も応募していて不採択になったこともあります。だからといってやめるということはならないし、やろうとした活動ができるなくなることはあると思いますが、問題意識は持続していると思います。

青尾 「助成を受けた当時の活動の変化と団体の変化」という項目では、規模拡大の基礎作りに役立ったとか、知名度・信頼度が上

きものになるのではと期待をしています。

青尾 こういう長い期間、コミュニケーションが途切れてしまうと、それでだいぶん距離が広がってしまうので、お互いの顔を見ながらつながっているんだという感覚が得られるのはとても大事ですね。

青尾 財団に期待したいことはありますか。成清 「地域の魅力をつくっている」そういう役割を期待しています。地域に魅力を感じるのって、人に魅力を感じているのだと思います。行ってみたいな、住んでみたいな、交流してみたいな、そういうのが一つひとつではなくつながっているんだという感覚が得られるのはとても大事ですね。

青尾 岡山県に来て3年ですが、地域ごとに魅力がある地域だと感じています。例えば足守は、全国的には知名度は低いかもしれません、すごくすてきな街並みがあつたり、歴史的な建物を紹介してい見やすいきれいな地図があつて、はしごを見ると、財団の支援を受けましたと書いてあって、なるほどと。そういう地域ごとの、地域とか人の魅力を生きと保っていく、向上させていくというのを感じました。

地域学のススメ

次世代の育成のために
地域社会と学校がパートナーになる

地域の課題を自らの課題と捉え、地域の人たちと関わ
りながら、主体的に課題解決に取り組む学習「地域
学」。「高校生と地域」の取り組みは全国的に注目され
ています。このコーナーでは、教育文化活動助成で応
援している岡山県内の「地域学」の事例を紹介します。

共に未来を語り合う
時間・空間を創り出す

活動テーマ　　団体名　　うおうお班

「1億年前からのタイムカプセル?
特別天然記念物を食べてみたい!」

蒜山ミライ会議
内田浩文(指導教諭)

「真庭市蒜山地域の活性化と、岡山県立勝
山高等学校蒜山校地と地域社会の連携を深
め、未来を共創する活動をサポートするため
に蒜山ミライ会議の活動を2020年度か
ら始めました。地域・行政・高等学校の連携を
強化し、目の前にある課題を「自分事」として
捉えることができる人材育成を目的に、「提
案型インナーシップ」と「蒜山ミライ会議」に
取り組んでいます。

「提案型インナーシップ」では、従来の職業体
験を提案型に発展させ、地域課題の解決を目指
す生徒たちが地域内の事業所に提案・協働
します。「蒜山ミライ会議」は、生徒と地域住
民が地域課題の解決策について話し合います。

高校生だけに意識改革を求めるのではなく
く、地域に暮らす「大人たち」にも、既存の枠
を破る勇気が求められています。世代を超
て発想を共有し、共に未来を語り合う時間、
空間を創り出すことは、地域社会において急
務だと考えています。

高校生にとって、地域社会は「なにもない」所
ではなく、持続発展可能性と魅力にあふれた
エリアであると認識されるようになると共
に、地域活性化のキーパーソンとして蒜山以外
の地でも活躍できるようになつてほしいと願つ
ています。

提案型インナーシップからミライ会議、そ
して今年取り組んでいるプロジェクト学習を通
じて、生徒たちは「自分を語ることができるよ
うになりました。卑下するのでも尊大になるの
でもなく、まっとうに自分と向き合う。そして、
隣にいる友人を認める。これもまた、地域を活
性化する上で大切な資質・能力だと思います。

活動について

団体名　　「無色」だった中庭に「色彩」を！チーム
活動テーマ　　「蒜校パレットに多彩な色を



杉村美紗都さん
「18年間生活してきた地元には、時代とともに変化して
いく「生き方」の中で消えていった貴重な文化があるこ
と、そして受け継がれることなく消えかけている文化が
たくさんあることを知る機会となりました。」



(左から)小谷琴羽さん、遠藤聖佳さん、杉村真輝さん、杉村美紗都さん、宮本郁美さん



内田浩文さん

川越博文さん
「今回の活動を通して同じゴールを目指すメンバーが個性
を活かしながらグループに貢献する仕組みを学ぶことが
できました。今後はますます調和性が重要になってくる
と思いますが、その土台を学ぶことができた貴重な機会
でした。」



(前例左から)永田陽菜さん、奥田日和さん、美甘里奈さん
(後列左から)川越博文さん、國森結理奈さん、高田連さん



文・谷本尚子
／NPO法人いーなプロジェクト 代表



絵本で出てくるおやつを作ろう！パン作りに挑戦する子どもたち



文・徳田敦之／La puerta 代表



活動をはじめた理由

「いーなキャリア教育イベント
「かがみの未来'ラボ」」
小中学生に向けて楽しいキャリア教育となる職業体験イベントを開催する。イベントは地元での職業の幅が広がるように大人(職業紹介する側)と子ども(将来を考える側)が交流できるグループワークや体験を実施。さまざまな職業を身近に感じてもらい、将来を決める第一歩にしてもらう。

私は三人の息子がいます。中でも長男は軽度の広汎性発達障害があり、何の知識もない私はずいぶんと思いついた時期がありました。なぜ、この町には通級がないんだろう？なぜこの町には放課後デイサービスがないんだろう？なぜこの町には悩むママが気軽に相談できる場所がないんだろう？

長男はその人付き合いのしにくい性質からいじめにあつっていました。そうした経緯から長男は「こんな町、いい思い出なんかまったくない」と言って夢を追いかけ、中学進学の際に町を出て行ってしまいました。

夏休みにはサマーキャンプに行かせ、冬休みにはスキー教室一年を通して少年野球チームなどでは、友達に恵まれ、笑顔の時間がありました。

そうだ学校以外でも友人はできる。仲間もできる。楽しい思い出もたくさんできる！子育てに悩むお母さんたち、うまく親の愛情を受け取れない子どもたちが、少しでも解決に向かえるようにしたい！そして、子どもたちがずっとこの町に暮らしたい、生まれ育つてよかつたと思ってくれる。そんな町にしていきたい。そのためには必要なものは：と、立ち上げたのがNPO法人いーなプロジェクトです。「あつたらいーな」を企画実現化していくための法人。

NPO法人にしたことで仲間が増え、町の活性化も視野に入れ、教育、防災、観光、子育て支援、介護福祉の充実、産業の発展など活動が広がりました。今できる未来への種まきをどんどんやっていきたいです。



高校生に声をかけるボランティアの社会人

最初は互いに緊張してしまいますが、回数を重ねることに打ち解けていき、徐々に本音での対話ができるようなり、高校生がオープンな気持ちになっていく姿を目の当たりにしました。そして、仕事以外で初めて出会う大人たちが一緒に目的に向かうことでチームワークが生まれたことからも、特別な達成感を得ました。

この活動の価値を実感し、今年度から私たちが運営していくします。今後はここに参加した大人たちが継続してつながれる、また卒業しても新しい大人ともつながれる、そんなコミュニティをつくりたいと描き、仲間を増やしていくこうと考えています。

地域の大人が関わることで、高校生が前向きになれる社会をつくりたい。」この想いが活動を始めた理由です。La puerta(ラ・エルタ)には、スペイン語で“扉”という意味があります。私たちの活動が高校生にとって、自分自身の新しい“扉”を開き、未来へ一歩踏み出していくきっかけになればと願い決めました。

現在、飲食店で店長として働いていますが、もともとは教師を目指していました。いつか教育現場に関わるようなことがしたいと考えていたとき見つけたのが、岡山県生涯学習センターの“つながる授業”でした。

とにかく行動してみようと思い、応募。活動は定時制高校の授業に親でも先生でもない地域の大人が参加し、人と関わることの楽しさを実感してもらう、というものでした。活動の趣旨に共感し、参加を決めました。

最初は互いに緊張してしまいますが、回数を重ねることに打ち解けていき、徐々に本音での対話ができるようなり、高校生がオープンな気持ちになっていく姿を目の当たりにしました。そして、仕事以外で初めて出

会う大人たちが一緒に目的に向かうことでチームワー

クが生まれたことからも、特別な達成感を得ました。

この活動の価値を実感し、今年度から私たちが運営

していくます。今後はここに参加した大人たちが継続してつながれる、また卒業しても新しい大人ともつながれる、そんなコミュニティをつくりたいと描き、仲間を増やしていくこうと考えています。

この活動の価値を実感し、今年度から私たちが運営

していくます。今後はここに参加した大人たちが継続してつながれる、また卒業しても新しい大人ともつながれる、そんなコミュニティをつくりたいと描き、仲間を増やしていくこうと考えています。

この活動の価値を実感し、今年度から私たちが運営

していくます。今後はここに参加した大人たちが継続してつながれる、また卒業しても新しい大人ともつながれる、そんなコミュニティをつくりたいと描き、仲間を増やしていくこうと考えています。



FACE

cine/maniwa 黒川 愛さん

“自分の想像の外”と触れ
映画と地域文化の世界。

「自分の想像の外」と触れる、映画と地域文化の世界。

黒川さんが移住したのは10年前。「真庭の人たちと映画を観たい!」という思いから、映画監督の山崎樹一郎さんらが立ち上げたシネマ二ワに参加。シネマ二ワの活動変遷は『紅葉』『ひかりのおと』

黒川愛 kurokawa ai
cine/maniwa

1976年大阪府和泉市生まれ。2010年は大阪府から真庭市に移住。cine/maniwa.中央図書館サボーターズ、真庭・食べる薬草振興協議会、勝山町並み保存地区内のFUNAYADOを運営する(一社)やまのふねなどの一員として地域と関わる。真庭市議会議員(写真左)

森分志学 moriwake shigaku
NPO法人だっぴ 代表理事

1990年岡山県倉敷市生まれ。大学卒業後は、教育系の広告代理店に勤務。2017年、NPO法人だっぴの理事・事務局長として岡山にリターン。岡山の中高生・大学生を対象に、キャリア教育プログラム「中学生・高校生だっぴ」を岡山県内外12市町村20校以上の学校で展開。(写真右)

らすれば宝物に見えますが、知らない人にとってはただの草。地域文化が、そこにあるのに見えなかつた豊かさや美しさに気づくきっかけになることもあります。その点で、発酵文化や石垣など、地域の人たちの支えによつて残つてきた真庭の文化は希望だと思います。今後の野望の1つとしてみんなが楽しめる映画祭をまたやりたいと話す黒川さん。真庭市の文化芸術を盛り上げるチャレンジはまだ続きます。

などの映画製作から始まり、製作に関わる人材育成を行うべく、ワークショップも実施するようになります。そして、公教育の中で映画に触られるような取り組みも始めます。現在は、図書館サポーターズと呼ばれるボランティアの方々と一緒に、真庭市立図書館で月1回の上映会も行っています。また、映画祭も企画運営し、昨年はドイツ、昨年はポーランド映画をテーマに選びました。

シネマーワークをやっている黒川さんとだからこそ考えてみたい、「子どもたちにとって映画を観るとは、一体どんな意味があるのか?」。あ

活動資金の基本の「き」を学ぶ —— 活動を継続させるためには？

vol.12

and F 教室

体验記

「活動資金の基本の「き」を学ぶ」は、『永遠の』課題とも言われている資金調達について、7月25日オンラインで開催しました。その体験を黒部麻子さんにレポートしていただきました。

でも、その活動を始め、継続していくためには、お金が必要です。そのお金をどうやって調達するか？ 今回はこの、もっとも切実なテーマについて学べるということで、どんな話が聞けるのだろうと期待して参加しました。

講師は、公益財団法人岡山県文化連盟主任の高田佳奈さん。高田さんは、県内に2人しかいないという、認定ファンドレイザー(※)でもあります。ファンドレイジング(Fundraising)とは、すばり資金調達のこと。非営利活動を行う団体が、活動資金を個人や法人、政府などから集める行為のことです。

問題なのは、「いい活動をしているだけではお金は得られない」という、厳しい現実です。こうした団体の収益構造は、通常の取引や商売ではない、つまり活動による受益者（サービスを提供する相手）から対価を得る形ではありません。そうではなく、「玉突き型」といって、支援者→団体→受益者という構造になっています。ここで言う支援者とは、財団や行政、寄付者などです。そこから助成金や補助金、寄付などの形で資金を得て、サービス提供は、おもに社会的弱者などに対して行われる、この仕組みをきちんと理解することが大事だと、高田さんは言います。

だからこそ、自分たちの活動の価値や意義をきちんと理解して説明していくことが重要です。そうした発信によって、興味や関心をもってもらい、共感してもらう。助成金や寄付金とは「あなたたちに託します」という、いわば共感の連鎖なのです。まさに、ファンドレイジングとは、「ファン(Fan)度レイジング」、共感者を獲得することなんですね!

そのために、「私たちの夢は〇〇です」といつでも言えるようにしておくことが大事です。組織の方向性を見失わないために、代表者だけでなく、組織全体で定期的に共有していってほしいと、高田さん。活動資金を集めることは、最終的には社会を変えていく手段でもあります。文化・芸術系の団体であっても、何かしら社会とのつながりを意識して打ち出していくことが大事だと言います。

最後に、どんな助成を活用したらいいのかとか、申請書の書き方のコツといった、個別の相談にも応じてもらえるとのこと。また、福武教育文化振興財団事務局長の小川隆正さんも「うちの方にも、こんなこと聞いていいのかな?ということでも気軽にお問い合わせください」と言わせていました。この日は、惜しくも今年度の助成は不採択になった団体の方も参加されていましたが、このように、採択・不採択で終わらず、継続して学んでいく機会が用意されていることは、とても心強いと感じました。



(※)認定ファンドレイザー=日本ファンドレイジング協会による試験に合格し、かつ有償での実務経験を3年以上積んだ者に与えられる資格。



講師：高田佳奈氏
公益社団法人岡山県文化連盟主任
／認定ファンドレイザー

1978年岡山市生まれ。2008年の入職以来、行政、文化団体、文化関係公益法人等を「まとめ」「つなぎ」「のばす」県内唯一のネットワーク団体職員として、県有施設の指定管理業務、行政からの委託事業、多様な主体との協働事業を行うほか、公立小中学校で子どもたちに本物の文化体験を届ける学校出席前講座のチーフコーディネーターとして、年間150～200件の講座を総括する。2017年度からは中国地方初の地域アーツカウンシルとなる「おかやま文化芸術アソシエイツ」を担当し、プログラムオフィサーを兼務。



大森 誠一

OOMORI Seiichi

NPO法人アートファーム 代表理事
果の実ファーム 代表

1950年岡山市生まれ。編集者とコーピーライターの傍ら92年にアートファームを創立、2005年にNPO法人化。地域と舞台芸術をつなぐ創造発信・人材育成・鑑賞促進・普及啓発・協働連携事業のほか、公立劇場や公益財団のプロデュース事業に取り組む。11年から家業の果樹栽培も受け継ぎ、文化と農業を兼業し現在に至る。団体として01年岡山芸術文化賞準グランプリ、02年福武文化奨励賞、14年岡山市文化奨励賞を受賞。

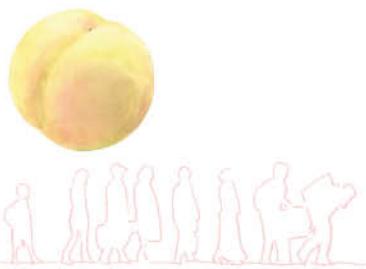
NPO法人アートファーム <http://www.artfarm.or.jp/>

表紙に掲載された桃は今夏、わが家の果の実ファームで採れた清水白桃です。Mother Treeと名付けた園地の大樹に実った一玉をお披露目しました。私と妻が岡山特産の桃と葡萄の果樹栽培を始めてから10年、今年やっと桃栽培のコツを会得した心境です。二人の出会いは30年近く前、私の主宰するNPO法人アートファームから始まります。以来、演劇やダンスなど舞台芸術の創造・鑑賞・育成・普及・協働の5事業を柱に数々の活動に取り組んできました。その創立マニユフェストに「未踏の荒野を開墾するように岡山という文化風土に蒔かれた小さな種子を、たいせつに育ててゆきたい。促成栽培ではなく、手作り栽培でゆっくりと。より豊かな舞台芸術を実らせるための百年浪漫——」と掲げています。アートヒファームの活動と精神を、分かれ難く結びつけながら歩んできました。

バブル経済の崩壊後に発足したアートファーム、東日本大震災を契機に営農した果の実ファーム、そして、コロナ禍後の文化と農業の土壤に、これからも種を蒔き育て、花を咲かせ実らせる營みを続けます。

二人の出会いは30年近く前、私の主宰するNPO法人アートファームから始まります。以来、演劇やダンスなど舞台芸術の創造・鑑賞・育成・普及・協働の5事業を柱に数々の活動に取り組んできました。その創立マニユフェストに「未踏の荒野を開墾するように岡山という文化風土に蒔かれた小さな種子を、たいせつに育ててゆきたい。促成栽培ではなく、手作り栽培でゆっくりと。より豊かな舞台芸術を実らせるための百年浪漫——」と掲げています。アートヒファームの活動と精神を、分かれ難く結びつけながら歩んできました。

二人の出会いは30年近く前、私の主宰するNPO法人アートファームから始まります。以来、演劇やダンスなど舞台芸術の創造・鑑賞・育成・普及・協働の5事業を柱に数々の活動に取り組んできました。その創立マニユフェストに「未踏の荒野を開墾するように岡山という文化風土に蒔かれた小さな種子を、たいせつに育ててゆきたい。促成栽培ではなく、手作り栽培でゆっくりと。より豊かな舞台芸術を実らせるための百年浪漫——」と掲げています。アートヒファームの活動と精神を、分かれ難く結びつけながら歩んできました。



Editor's Column

■今から35年前、福武書店(現ベネッセホールディングス)を設立した福武哲彦氏が70歳で急逝し、長男の總一郎氏が40歳で社業を受け継いだ。同時に亡父の遺志について、福武教育振興財団(現福武教育文化振興財団)を設立。初代理事長をお願いしたのは、父の盟友、谷口澄夫氏であった。谷口先生は、岡山大学学長から、兵庫教育大学初代学長、倉敷芸術科学大学、就実大学学長等を歴任され岡山県名誉県民にもなられた教育界の重鎮だった。■谷口先生は、本誌「fueki」の命名者でもあるが、日ごろから「不易流行」の重要性を繰り返された。「教育と文化のいすれにおいても、変遷著しい社会や人の心は十分に認識し対応することは必要」だが、「いたずらに社会の変転に右顧左眄することなく、財団のよって立つべき普遍の基本理念をしっかりと押さえ」事業を行わなければならない。35年たった今も大切なメッセージである。■さて昨年度から「and Fオンライン情報交換会」として、助成活動をされている方々とZoomで定期的に会合をしている。10団体前後の方と数名の審査委員が画面上でつながり、自己紹介、活動報告や悩みなどを気兼ねなく話す機会だ。エリア別に順次開催しているが、評判もよいので、今後はテーマ別に集っていただこうと考えている。■今年度の成果報告会も昨年に引き続き、オンラインでの報告会となる。個別の報告が集中して聞けたという声も多いので、今年は、より多くの発表団体を募り、皆さんの発信力をお手伝いしたいと考えている。■救世主だったはずのワクチン接種も万能ではなく、新型コロナの終わりは益々不透明だが、財団初期の基盤づくりに専念された谷口先生の言葉「不易流行」を反芻しながら、助成団体の皆さんのために財団に何が出来るのか自問しながら、前に進んでいきたい。(O)



公

益
財團法人

福武教育文化振興財団

人づくり、地域づくりを応援します

〒700-0806 岡山市北区広瀬町1番5号

株式会社ベネッセコーポレーション広瀬町社屋

TEL:086-221-5254 FAX:086-232-3190

URL: <http://www.fukutake.or.jp/ec/>E-MAIL: eczaidan@fukutake.or.jp

機関誌 不易 FUEKI vol.76 2021.9.25

編集・発行:

公益財団法人福武教育文化振興財団

制作: 株式会社吉備人

デザイン・イラスト: タケシマレイコ

印刷: 研精堂印刷株式会社